

看護エッセイ

2004年から連載された看護師のエッセイが、50編を超えました。
看護の心が、さまざまなテーマで描かれています。



Vol.8

国と言葉を超えてー海外の看護

地球は私たちのコミュニティ。
看護は国境を越えて存在します。



心が動いた経験

聖路加看護大学大学院博士後期課程 小黒 道子



皆さんにとって、これまで生きてきた中で「心が動いた」経験とはどのようなものでしょうか。自分にとって決して忘れえぬ、人生に影響を与えた経験。それが私にはミャンマーという国で働いているさなか、何の気なしに訪れた地方のあるお寺で起こりました。ミャンマー連邦（旧ビルマ）一、人口約 5200万人で135の民族が混在し東南アジアに位置する仏教国、それよりも発展途上国や軍事政権、あるいはアウンサン・スー・チー女史といったキーワードを思い浮かべる方のほうが多いかもしれません。否、ミャンマーという国自体について全く知る機会のない方のほうが多数でしょうか。しかし近代の歴史を見ると、日本とミャンマーは驚くほどつながりが深く、官民ともに密接な交流があったことがわかります。

助産師である私がこの国での活動に従事して一年以上過ぎた頃、私は遣り残した仕事の数々と自分の能力のなさを実感しつつ、任期切れが迫り今後の身の振り方を考えねばならない時期が来ました。先に述べたお寺を訪れたのはちょうどこの頃と重なります。お寺の大僧正は私が日本人であることがわかると、第二次世界大戦の時の出来事をゆっくりと語り始めました。「私がまだ子どもの頃のことだけど、日本の兵隊さんたちのことはとてもよく覚えていますよ。少人数にもかかわらず圧倒的多数のイギリス軍を戦術で破ったときには、子どもながらに日本人はすごい、と思ったものです。」日本軍は当時、後に世界戦史上最悪の作戦といわれるインパール作戦のため8万人以上をビルマ戦線に投入していました。戦死及び飢え・病気による戦病者計7万人以上と、日本軍の撤退路は「白骨街道」と呼ばれるほど日本の軍服を着た屍が続いていたといえます。ご遺族や戦友の方々が戦後

60年を経た今も慰霊団としてミャンマーを訪問し祈りをささげる姿は、7万人以上の戦没者一人ひとりにかけてえのない人生があったこと、そして60年以上前にこの地で亡くなった方々の思いに心を馳せる時間を私に与えるようになっていました。大僧正はさらに続けます。「当時の私の感覚では黒い日本人と白い日本人（大僧正の表現のママ）がいて、黒い日本人はあまり良い人ではなかったけど白い日本人にはとても良い印象がありました。白い日本人の中には私のようなミャンマー人の子どもをととてもかわいがってくれて、戦闘の合間に持っているナイフで木彫りの人形を彫ってくれたりしたのですよ。」



60年後に同じ日本人としてミャンマーの地を訪れた私はこの国で何ひとつやり遂げず、先に進んでいくしかないのかなあ—そんなことを考えていたら、お寺を去る時間となりました。車に乗ろうとすると、大僧正は私に何かを手渡そうとしました。—黒くて埃っぽい木彫りの動物—そう、60年前の日本人からミャンマー人に渡されたものが、時を経てまた日本人に戻ってきたのでした。「ああ、バトンが回ってきたんだ。」なぜか自然とそう思えた私は、その後様々な課題をクリアしつつ、現在、本大学の博士課程の院生としてミャンマー農村部で住民自身が地域の母と子の保健環境向上をめざすサポート・プログラムに携わっています。

意識・無意識に関わらず自分が存在する以前の過去と今の私が 確実につながっていることに気づかせてくれた地で、私は今を生きる日本の助産師として、何より人間として、ミャンマーの人々と共に泣いたり、笑ったり、怒ったりしながら自分の健康を自分で守る術を考える時間を楽しむ日々を送っております。



年輩看護師を支えるもの

看護師 田代 順子



お仕事はと聞かれて、「看護師です」と答えると、「大変なお仕事ですね」とねぎらっていただくことがしばしばです。多分、看護することが「大変」であると思ったら、今日まで、看護職として仕事を続けてこなかったかも知れません。私は、既に、年輩看護師の一人ですので、すでに 30 数年間、看護職として、多くの場で、様々な仕事をし、現在、大学院生の研究法や看護理論、そして国際看護学の看護教員として働いています。学部を卒業した時、自らの現在の専門性については考えも及びませんでした。30 余年間の看護職としての私の歩みは、日本の看護の専門職化の歩みと重なり、多くの看護の場で出会った人々からの学びの機会が与えられ、そして人生の本質を探求する歩みであり、それが看護師の原動力であったように思います。看護の本質は、健康な生活が基本的人権であり、全ての人に保障されるべきものであるという価値に立って、患者様あるいはクライアントの人権としての健康を基本的ニーズの側面から生きられる時間の中で助けることです。

まず、人は生きら時間に限りがあることを教えていただいたのは、20 歳代の患者様でした。その若い患者様は高校生の時から肺結核で長く療養生活をし、健康を回復して、やっと、社会に出て仕事を始めた矢先に、風邪かと思う体調の変化で、聖路加国際病院に受診しました。診察の結果、即、入院で精密検査でした。患者様は再度、入院するような状況になったことで、自らの道が再び絶たれてしまったことでふさぎ込んでおられました。診断は急性腎不全、余命 3 ヶ月とのことで、両親のおられる郷里に帰られることになり、退院になりました。退院の時に、お礼ということで、看護師である私を励ます詩を残してくださいました。なんと皮肉なことか、健康に恵まれた私が、健康を失いそして生命までも絶たれようとしている方から励まされてしまいました。このように、健康が当たり前であった私は、初めて、健康がいかに大切で、生きられる時間は限られて、与えられていることを、若い患者様の短かった人生の時間を共有させていただいたことで初めて、気づき、学ばされたのでした。

全ての人々が健康に生きる権利の保障をすることは、看護の本質ですが、未だに活動中の課題です。看護教員として働き始めて、パキスタンの首都、イスラマバードで小児看護教育の長期派遣の専門家としての協力活動の機会が与えられました。実習先で出会う患児は、栄養不良で、虚弱でその家族は入院していても不安そうでした。また、治療を受けることもなく亡くなる多くの人々が多いことも知りました。世界の健康状態の格差は、大きいものでした。世界保健機関（WHO）が創立されてから、60 年がたちますが、依然とし

てこの課題に立ち向かっています。WHOの提唱する戦略は、個人、組織、そして国レベルの協力です。日本にも健康に恵まれない人々がいるのになぜ海外まで行ってと言われる方もおられますが、すでに、地球が私たちのコミュニティで隣人は地球上にいるということで、看護は国境も越えて存在します。

30余年間、看護職を通して、なんと多くの人々との出会いと経験が私の歩みを豊かにしてくれたことかと、看護職であることに感謝の念で一杯です。これから の進路を考えている若い方に、看護職は大変かも知れませんが、良き職業であるとお勧めしますし、これから国境を越えて、地球人として同じ時間を生きる仲間 として、共に生きられたらと思います。



国際看護 ～国と言葉の壁を越えて～

聖路加看護大学 看護師 長松 康子



私は聖路加看護大学で国際看護学の教員をしています。国際看護は、健康をグローバルにとらえ、国境を越えて人々の健康に資するための看護を実践していくための科学です。聖路加看護大学には、将来、途上国を中心に海外で働きたいと考えている学生さんがたくさんいます。

しかし、私が学生のころは国際看護という概念はまだありませんでした。看護師が外国で働くといえば、アメリカで看護免許取得して看護師になることのほうがメジャーで、こちらを目指している先輩が何人もいました。

私が国際看護に興味をもったのは、外科病棟の経験からです。少し英語ができた私は、沢山の外国人患者さんを受け持ちました。

しかし、経鼻チューブや、酸素マスクが邪魔して、患者さんの言葉はなかなか聞き取れず、苦劳しました。ましてや、気持ちを傾聴し、共感するとなれば、言葉 だけでなく、患者さんの文化に根ざしたコミュニケーション能力が必要で、ネイティブ・スピーカーでない私にはお手上げでした。わからない、伝わらないこと に悩む私に先輩看護師は「看護は言葉の障害を越える。」と、いい放ちました。釈然としないながらも、ケアを続ける私に、決定的な出来事が起こりました。脳 血管障害の手術目的でグアムからヘリコプターで搬送されてきた外国人患者さんが、手術前に急死してしまったのです。はるばるグアムから付き添

っていらした ご家族にどうやって説明したらよいのか途方にくれました。状況から、事実を伝える以上に、精神的ケアが必要で、それにはネイティブに匹敵する言語能力が必要なことは明らかだったからです。

看護は言葉ではありません。しかし、言葉がどうしても必要なときもあるのです。外国人の方にも日本人と同じように良質な看護を提供してあげられる看護師がいてもいいと考えた私は、外国語での看護を習得する方法を探し始めました。どうしても外国にいて、さまざまな言葉と文化に触れる必要があると思い、文部科学省、外務省、厚生労働省、企業、学校、大使館と、考えつく限りのところに頼みに行きました。

しかし、若い看護師が渡航就労するのはまだまだ困難で、2年たっても渡航先は見つかりませんでした。看護協会では、「日本に看護師が足りないときに、学士看護師が外国で働くとはけしからん」と叱られました。

外国の病院をひとつひとつ、訪ねるうちに、シンガポールの看護協会の会長さんが自ら英語を指導してくださり、その後、イギリス系企業に勤務しました。アジア 10 カ国からの職員が働くその会社は、英語とアジア文化を学ぶにうってつけでした。その後大学院で国際保健学を学び、臨床に帰ることはありませんでしたが、若い頃に臨床で出会った患者さんのことを忘れることはありません。私の使命は、日本の外国人患者さんの健康のために働くこと、そしてこれから世界中に飛び立っていく看護師を育て、応援することだと思っています。



標高 4000 メートルのボリビアで働く仲間
助産師 堀内成子



成田空港を飛び立ってから、約 28 時間後にボリビアの首都ラパスに到着。8 月 6 日冷たい雨とヒョウがちらつく冬の日だった。私は、着陸の際のランディングで気分が悪く、さらに寒さでことばも出ない。迎えてくれたのは、JICA の長期専門家の助産師の田中さんと、看護師で調整員の伊藤さんである。二人は、海外青年協力隊の時代にボリビアでの経験があるスペイン語の堪能な女性たちである。

ボリビアは、南米大陸のほぼ中央、アンデス山脈の真ん中で海を持たない国である。ラパス市は、標高 3650 メートルの世界最高所にある首都として知られている。大きなすり鉢

状の街は、上から日干しレンガの貧しい家々、底の部分は、高層ビルも立ち並ぶ裕福な人々の暮らす地域になっている。信号機のない急勾配の坂道を、乗り合いバスやトラックが黒い排気ガスを頭上から吐きながら走っている。日本車への信頼は厚く TOYOTA、NISSAN と書いた中古車をたくさん見かける。民族衣装のスカートにマフラーそしておしゃれな帽子に身を包んだ女性たちが、道端で商売をしている。アンデスカラーの布にこどもを巻いておんぶしている、日焼けした母親の顔はたくましく輝いていた。

ラパス市を中心にして、JICA の母子保健プロジェクトは、ボリビア国の「安全な母性・出生」計画を支援し、特に「出産における母親とこどもに優しいケア」の普及を行っている。陣痛中の女性に優しく寄り添い痛みを緩和するケアという発想そのものが乏しかった産婦人科をもつ保健センターを中心とした活動が 2004 年から始まっている。これは、WHO の正常分娩の勧告や、エビデンスに基づく医療、ケアの質を向上させたいというボリビア保健・スポーツ省の考え、そしてブラジルで JICA が 1999 年から 5 年間にわたって展開した「人間らしい出産と出生」プロジェクトをモデルにして展開されている。

視察に行った 4 ヶ所の保健センターでは、陣痛が起こって入院してきた女性たちが過ごす部屋には、エンジ色のベッドとベッドを仕切るカーテンが新たに設置され、分娩中の自由な姿勢を表す JICA 作成のポスターが貼られていた。痛みを緩和するためのマッサージを行うと、産婦さんが力づけられ、またマットレスの上で自由な姿勢を自分で探すことのできた女性たちは満足した出産体験であったとの評価である。

今回、一緒に出かけた短期専門家の毛利さんは、ブラジルでのプロジェクトの経験を持ち、どうやったらプロジェクトが成功するかを心得ていた。女性と医療スタッフが、お産というひとつの舞台を成功に導くために関係しあうことは、双方に内的変化が起こりそれは長期にわたって影響するという。「優しくされた経験」は、「他者への優しさに変換できる」と研修生も答えている。

ボリビアで初期研修を受けた医療スタッフの中から、意欲的な医師・看護師、准看護師をブラジルに送り、その変革の中心になるよう、またどのような成果を追跡するのを学ぶ機会を得た。ブラジルのプロジェクトは、「光のプロジェクト」と呼ばれ、出産が「光のなかへさしだす命」という意味からきているという。これはスペイン語圏のボリビアでも通じるものであった。日本からブラジルへ、そのリーディング・モデルがボリビアへと連鎖していた。

ボリビアの医療においては、いまだ医師と患者関係は指示者と従者であり、女性の意思の尊重という概念が、一般社会においても希薄であるという。DV（ドメスティック・バイオレンス）も多く、女性は妊娠・分娩時にも大切に扱われない現実もあるようだ。インカ

文明から大切に引き継いできた人々の健康行動も尊重した人間らしいケアモデル、それも「女性を中心としたケア」(Women-centered care) の概念にそったアプローチを提供することが今回の私の任務である。

季節は冬だが日中は日差しがまぶしく紫外線は日本の20倍(?)、湿度は20%のため、顔はひび割れ、喉はカラカラ、眼からは涙である。日が沈むと急に5度程度に気温が下がるため、オーバーがないとブルブルである。高山病の予防をしても、現実には厳しかった。坂を登れば息が切れ、食事をしては息が切れ、お風呂から上がれば息が切れ、2階まで階段を登れば息が切れるという状態であった。こんな厳しい自然環境で暮らしている人々に脱帽であった。そして異文化を超えて女性たちを応援し、精力的に働く日本の若い看護職にも乾杯といたい。



向かって左から、
毛利・田中・伊藤・堀内



市場で見かけた、
子どもをおんぶするおかあさん！



